

◆荒井良明 選

《言葉の呪縛から解き放つ「写生」の一句》

釣瓶落としとずるずる海に没る夕陽 寺井谷子

釣瓶は「急速に落ちる」。つまり、釣瓶の落ちる速度（スピード）は速いが、太陽の沈む速度は季節によって変わるわけではない。しかし、秋の日が暮れやすい実感があり、かつ、「釣瓶落とし」という言葉にひきずられて、秋の太陽の没するスピードが速いような気がしていた。（そんな迂闊者は私だけ？）

掲句に接して、「釣瓶落とし」という言葉の呪縛から解き放たれた。そうか、海に落ちる太陽は、ストーンと落ちるわけではなく、「ずるずる」と、のんびんだらり（緊張感を欠いた状態で、いたずらに時間ばかり費やしている様子・『新明解国語辞典』）と、ゆっくりと落ちていくんだ。（掲句の「没る」は「おちる」または「おつる」と読むのだろう）。

海に落ちる太陽を眺めた人は多いだろうが、秋の入り日を「ずるずる落ちる」と表現し得た人は、寡聞にして知らない。「写生」でこの表現に至った寺井谷子はさすがである。掲句に一瞬「？」と思い、句意がわかって、ほほえんだ。滑稽味ある一句。

《下五で裏切りの種明かし》

真夜中の突貫工事霜柱 八塚一青

「真夜中の突貫工事」で「ん？」と思わせておいて、下五の「霜柱」で裏切りの種明かし。

《押韻のおかしさ》

腹立てて水呑む蜂や手水鉢 たいぎ太祇

炭太祇は、宝永六年（一七〇九年）～ 明和八年（一七七一年）、江戸時代中期の俳人。晩年、大徳寺の僧となった後、島原遊郭に不夜庵を結び、蕪村とも交流があった。蜂と鉢の押韻のおかしさの句。

ハチ公に蜂の八羽の渋谷かな

良明

### 《三橋鷹女の機転と見立て》

昼顔に電流かよひるはせぬか

三橋鷹女

掲句に接したとき私は、ヴェネツィア国際映画祭で金獅子賞を受賞した映画「昼顔」（ルイス・ブニュエル監督、カトリーヌ・ドヌーヴ主演）を想起した。映画は一九六七年（ケッセルの原作は一九二九年）で、掲句は一九三六年発表であるが、掲句がケッセルの作品の影響を受けたことはない、と私は思う。

「鷹女の句は機転や見立てが効いている表現が多いように思うが、それだけで終わってはいない。ひるがほを見ている自分もひるがほであり、ひるがほを通う電流は鷹女の身の内をも貫いている（三宅やよい）」。「機転や見立て」は、一句に俳味を与え、諧謔性を持たせることが多い。

### 《ユングの集合的無意識？》

洋の東西で、女性の内に秘めた情熱を「昼顔」に仮託する作品が作られた（しかも、同じような時期に）ということも興味深い。これは、ユングのいわゆる「集合的無意識」のなせる技か？

これ以上待つと昼顔になってしまう

池田澄子

女性と昼顔の繋がりには深そうだ。

### 《「黴臭い」のを芳香と感じる》

馥郁と黴の香立てり母の家

草間時彦

馥郁（ふくいく）は「よい香のただようさま」であり、香は「よいかおり」である。（広辞苑 第七版より）。そうすると、掲句は「黴のよい香のただよう母の家」となる。「黴のよいかおりだって？ 黴がいいにおいだというのか！」。大辞林第三版は、「黴臭い」に「かびが生えたようないやなにおいがする」という解説を与えている。なのにどうして…。

久しぶりに実家に帰った。ああ、この匂いが母の家の匂いだ。子どもの時から馴染んだ匂いだ。

「黴臭い」のを芳香と感ずる滑稽さと、母への思いの好ましさが同居した句。  
母が家近く便意もうれし花茶垣 中村草田男

### 《謎かけの答わからぬ現代人》

昼顔やとちらの露も間にあはず 横井也 有

読みやすく書くと、「ひるがおや どちらのつゆも まにあわず」。でも、「どちらの露」って何？ 頓智の問題かクイズみたいな句である。

昼顔の花に乾くや通り雨 正岡子規

昼顔は炎天下に咲き、通り雨が来たくらいでは、すぐに乾く。つまり、也有の句の答えは、朝顔には朝露、夕顔には夜露、その「どちらも」昼顔は「間にあはず」。

横井也 有は、江戸時代の武士、国学者、俳人。元禄十五年（一七〇二年）～天明三年（一七八三年）。八十二歳で没す。江戸時代の人には、この句の可笑しさが通じたんだね。「雪隠（便所）の火事」＝やけくそ、とか日常語だったからね。

こういう面白さは、現代の俳句では、全く失われている。